

令和4年度 第2回 学校運営協議会議事録

校名	府立むらの高等支援学校
校長名	森本 裕

開催日時	令和4年10月24日（月）
開催場所	共用棟2F 会議室
出席者（委員）	（会長）荒木 寛巳 （副会長）大森 千枝 （委員）石神 彰人 上國料 洋子 柏木 光枝 ※順不同、敬称略
出席者（学校） ※回覧	（校長）森本 裕 【事務局】（教頭）野村 佳津 （事務長）清水 幸雄 吉田 聖名子 重松 亮 活田 侑 阿南 幸佑 上田 航 岩里 哲朗 藤川 泰生
傍聴者	なし
協議資料	②授業参観アンケート集計結果、③学校教育自己診断について（報告）
備考	後日、議事録を学校ホームページで公開

議題等（次第順）
1) 校長挨拶 2) 報告 ・前期授業参観アンケート集計結果紹介（資料②-1 資料②-2） ・令和4年度学校教育自己診断の概要と診断票について（資料③-1 資料③-2 資料③-3） ・令和4年度学校経営計画の進捗状況について（資料④） 4) 協議 5) 校長挨拶 6) 諸連絡（事務局より）
協議内容（質問・意見の概要）
【委員による意見交換及び協議】 <保護者の立場から、参観の様子・ICT活用について> ・小中の参観は、他の保護者との情報交換をする場でもあったがむらの参観は他の保護者に会うことが少ない。様々な地域から登校しているせいもあるかと思うが、同じクラスの保護者に会う機会がない。私自身は中学が一緒だった保護者が複数名いるので、学校等で話ができる機会はある。しかし知り合いの方がいない保護者の方もおられるため、そのような方には積極的にPTA役員になっていただくことで、役員会等を通して保護者同士の交流が深まっていると感じている。 ・フォーム作成ツールによる学校教育自己診断の回答については、保護者によっては機器の使用の仕方がわからない保護者もいる。保護者の中で、操作が難しいと思い、感じている家庭への対処方法を考えてほしい。 ・子どもが少なくなっていることもあるが、高等専修学校などもあり保護者からは「どこにいかせようか？」となっている。むらのは就労にむけた取り組みを、生徒だけでなくPTAの活動を通して保護者にも学んでもらえる機会があることを、理解してもらえたらと思う。 →学校より回答 ・参観などで、来校された保護者には出席状況など確認しながら対応するように意識している。 <支援学校高等部卒業後を見据えた、中学からの進路選択について> ・就職後数年経つと、支援体制が難しいと感じている特例子会社の方がいらっしゃった。支援学校高等部卒業後就労した方を、だれがサポートしていくのか、という課題は常にあり就・の存在があっても「障害者就業・生活支援センター」とのやり取りを希望しない方もいる。むらのは、運営協議会で出た話題を実践するなど、凄いと感じている。むらの高等支援の取り組みを中学校の先生方にしっかり理解してもらい、進路指導をしてもらいたい。そして、高等部卒業後の就労をめざす生徒が、「社会で働く」とはどういうことかを学べる高等支援であることを、もっと中学校の教員に知ってもらいたい。

< 高等支援の受験者数が下がっていることについて >

・高等支援が開校当時は、倍率が高かった。今はなぜ、定員割れする学校や受験者数が減っているのか。また、障がいのある生徒の進路先として、公立学校だけでなく私立学校もあり、進路選択肢が増えていることが考えられる。

・専修学校など、進路選択肢が増えてはきているが、大切なのはその学校を卒業した後が大切である。卒業後のケアなど、どのようなになっているのか。

・「むらのは厳しい」という、イメージは子どもを入学させる前にはあった。今は、就労のために必要な学びであると理解できている。厳しいというイメージを持たれるのは、むらののことを知らないために持たれているものだと思う。中学校の教員に、むらのの取り組みを知ってもらいたい。良さを理解してもらえたら、進路選択の一つになると思う。

→学校より回答

・年度によって異なるが、令和4年度は支援学校からの受験者が減少していた。

< 定着率について >

・学校や事業所だけでは、難しい段階にきている。雇用する企業側の力をあげる必要があると考えている。雇用者数が増えていく中、企業側が変化していくことが大切。ただ、まだしばらく時間がかかるのでは、と感じている。

< 将来のために必要なこと >

・本人の希望で、仕事に就いたかどうかはとても大切である。家庭やプライベートが乱れたり、仕事がうまくいかなかったり、どちらが崩れても影響が大きい。そのためには、在学中に将来のための学びが必要。本日の授業見学では、タブレットを使って学んでいる様子を見学した。美術は、自分で考えて描写する、家庭科は家計簿の学習、間取りの見方など、社会で役立つ学びばかりであった。また、体育では体力づくりをしていて皆、体力があるなど感じた。

・ビジネスマナーなど、高等支援の取り組みは、社会で大切な内容になっている。

・将来の夢や、希望を描くことができるためにも、「就職したらどうしたいのか」「働いたらどうしたいのか」をイメージできるようになる必要がある。親元を離れて生活するといった場所や、生活の支援ができるシステムや場所が増えることが必要。

→学校より

・卒業生を招いての講話や、障がいのある当事者の方に来校いただきギター演奏をしてもらうなど、どのような生活をして過ごしているか、自分とはなにかを考える機会を設け、将来に役立つ学びをおこなっている。

< 保護者の支援・卒業後の支援 >

・保護者は、入学するときは、卒業後のことまで考えが及んでいない。また、卒業したら何とかなる、と思っている保護者も少なくない。卒業後何かあったとき、うまくいかなかったときに保護者はどこに相談するかを考えたとき、是非PTAの活動に参加してほしい。保護者同士が関係性を築いてもらい、何かあったら相談できるようになってもらいたい。講演会も様々取り組んでいる。保護者が知りたいと思われる内容を企画していきたい。PTAの活動活発にしていきたい。

・「障害者就業・生活支援センター」としても、保護者へ説明の重要性を認識している。中学校の保護者への理解を拡げる必要性を感じている。

・子どもの成長、親の高齢化が必然的に起こる。困ったときに「どうする」「どうしたら」「どんなふうに」のためにも、保護者支援をはじめトータル的な支援が必要。

以上